



平成 29 年度 近畿高等学校ソフトテニス選抜インドア大会 1 月 7 日 於：滋賀県長浜バイオ大学ドーム



米澤・小川組(和歌山/熊野) 0 — 4 圓山・森田組(京都/西城陽)

1 月 6 日～7 日の 2 日間に渡って、近畿大会に出場するため滋賀県まで行ってきました。本校出場ペアは 1 組でしたが、部員の強い希望により、男子部員 10 名全員で向かうこととなりました。本校選手が出場する個人戦は 7 日からでしたが、試合前日から滋賀入りし、6 日は団体戦出場校の試合を見学しました。やはりどの学校の選手もレベルが高く、特に自分からの初歩的なミスの少なさ、ファーストサービスの精度、レシーブミスの少なさ、大事な場面での勝負強さなどには目を見張るものがありました。自分たちもこの舞台に立ちたい、そのために更なる技術向上を目指さなければならない、という風に感じました。私以上に、選手の心にも同じ思いが芽生えたことと思います。

7 日の個人戦。本校選手は 2 試合目に初戦を迎え、対戦相手は京都府の西城陽高校のペアでした。試合前、私は選手に「1 勝すること」を目標にしていると初戦で足下をすくわれるから、2 勝以上することを目指そう」ということ、そして「思い通りに行かなくて苦しい状況になるかもしれないけれど、“自分のミスが…”、“ペアの調子が…”と、自分たちに矢印を向けてしまうと、突破口が見出せない。だから”相手は今どんな状況で、どんな攻め方をしてくれているか”、“相手のどこでミスが出ていて、どんな攻め方が有効か”を考えるようにしよう」ということを話しました。試合に入ると、最初の 1 ゲーム目こそ少し競ることができたものの、終わってみれば 0-4 のストレート負け。惨敗でした。

近畿大会を振り返ることで再認識した、チーム全体として克服すべき課題は、「単純なミスの多さ」「後衛のラリー力」「前衛の判断力・決定力」「メンタル面の弱さ」の 4 点が挙げられます。特に、メンタル面は最大の課題ではないかと感じています。大事な試合・大事な場面で緊張してしまい、普段どおりの思い切ったプレーができないことが、選手の中で常態化してしまい、強い相手に食らいついてでも立ち向かっていくことが出来なくなっているような気がします。これを乗り越えるためには、やはり普段の練習から真剣に、緊張感を持って取り組むことが必要不可欠だと考えています。練習を一生懸命やる。至極当たり前のことですが、「本当に試合を想定してできているか」「練習だからまあいいか」と言う気持ちは無いか」「練習のための練習になっていないか」…こういったことを突き詰めて考えたとき、自信を持って「一生懸命練習しています」と言える選手がどれだけいるか、その点においてまだ疑問が残ります。

【この冬を乗り越え、総体を迎えたときに「熊野が近畿に行けたのは、たまたまだったわけではない」と自らが結果で証明できるようになる】ということ新たなテーマに掲げ、努力を重ねていきたいと思っています。また、選手には、「ただソフトテニスが上手いだけの人」にはなって欲しくないと思っています。勉強も、礼儀作法も、挨拶も、もちろんソフトテニスも、全てに全力で取り組み、人間として大きく成長し、他の人から憧れられるような人になってもらいたいと願っています。

末筆ではございますが、このたびの近畿大会出場に際し、温かい応援を賜りました全ての皆様に、心より感謝申し上げます。これからも応援のほどよろしくお願いいたします。

熊野高等学校ソフトテニス部顧問
巽 大樹